



お楽しみはこれからだ

小野塚 恒 男

四階の社会科準備室から見える五頭連峰の山々が日ごとに緑色を増している。毎年のように同じ風景を眺めて七年が過ぎた。教員生活も、総仕上げの年になり、過去をふりかえることが多くなつた。

新採用の学校は昼間定時制の分校で、全校生徒が80名弱の小さな学校だつた。無我夢中の一年が過ぎ、二年目に、15人のクラスの担任になつた。生徒は一人ひとり、気が優しく、ひとなつこかつた。友たちおもいで明るく、笑顔が絶えなかつた。毎日が楽しく、いまから思えば、新採用が小規模校で本当によかつた。教員同士も仲が良く、先輩の先生方があれやこれやと親切に教えてくれた。のちに新

潟公立高教組で一緒にすることになつた先生には、初対面のときに「近代五種競技はやりますか？」ときかれた。「？」。「囲碁とか、麻雀は？」。「はい。囲碁も麻雀もやります。将棋も好きです」とこたえた。分校には四年いたが、その間、土曜日の午後に碁を打つたり、職員旅行先の宿で麻雀をやつたりして、オフの時間を楽しんだ。どちらも、大学時代に先輩から教えてもらった、消閑にも、娯楽にも、もつてこいのゲームである。

二校目の高校には普通科のほかに、農業科と被服科があつた。二年目に一年のクラス担任になり、そのままちあがつて、卒業生を送り出した。一年生の担任をしていたときは生徒の問題行動が多く、学校をやめる生徒がたくさんいた。わたし自身も心にまつたく余裕がなく、クラス運営は失敗の連続だつた。「生徒たちよ、早く(三階から)一階に降りてこい。降りてこい」(三階の一年生の教室から、早く、一階の三年生の教室に降りてこい。早く三年生になつてくれ。月日よ、早く流れてくれ)

にいがた

北から南から



と、そんなことばかりを思う毎日だった。一日一日が長く感じられ、勤務を終えた帰り道で、よく空を見上げては、「ふうーっ」とため息をついた。すべては自分の未熟さに原因があった。教員生活を続けるのは難儀なことだとつくづく思った。あれこれと思い悩んでいた1990年2月に、新潟公立高教組が結成された。尊敬できる先輩教師や同僚と一緒に組合活動ができると思い、迷うことなく加入した。その春の入学式で新潟公立高教組の分会として、初めてピラを作って、保護者に配布した。桜の花が満開だった。あのときの高揚した、誇らしい気持ちは、いまも忘れることができない。そして夏には、新潟公立高教組としては初めての県教研が開催された。その内容を知った新潟高教組の教員は「あなたちはこれがやりたかったんだね（だから、新しい組合をつくったんだね）」と言ってくれた。

三校目は新潟市内の全日制普通科の高校だった。10年間勤務し、五年間担任をして、二回卒業生を送り出した。入学式と卒業式が重苦

しい雰囲気に変わったのは、二度目の卒業学年の担任をしたころからだ。だつたらうか。「君が代」斉唱時のしめつけがひどくなり、教員が起立をしているかどうかを管理職が確認するようになったのだ。起立をしないのは「信用失墜行為」になります、ということだった。あきれてしまった。遠い昔、教員になりたてのころ、ふるさとの友人は「おれは教員なんてなりたくないし、なりたくてもなれないけど、卒業式を毎年経験できるのだけはうらやましいよ」といつてくれたが、「君が代」斉唱の時間は、苦痛以外のなものでもないんだよ」と言い返したい気持ちが、少しずつ、生まれてきていた。

2012年度がスタートして、まもなく、二ヶ月が過ぎようとしている。現任校は全日制普通科の高校で、いまは、三年生の担任をしている。二年目から一年生の担任をやり、一度、卒業生を出して、また、六年目から担任をして、現任はふたまわり目である。生徒の成長を日々実感し、喜びを感じている。大卒時代、わたしの目につる職業は、「高校教



師」ただ一つしかなかった。ほかの職業は考えられなかった。そして、いままで、どうにかこうにか、教員生活をつづけてくることができた。楽しいことがいっぱいあった。苦しく、つらいと思つたことも幾度となくあつた。はたして、この先の生活にはななが待つているのだろうか。いまのところ、想像はまったくできないが、それでも最近では、毎日のように無理矢理、自分に言い聞かせているセリフがある。「お楽しみはこれからだ」と。

(おのづか つねお・新潟市)

